

I 研究の概要

研究主題

「自ら考え、学び、表現する児童の育成」 ～豊かな学びをつくり、自ら学びに向かう授業づくり～

(1) 研究主題設定の理由

学習指導要領の改訂の経緯に記載されているとおり、新しい時代に必要となる資質・能力を備えた児童を育成するには、「どのように学ぶか」という視点で指導の改善・充実が必須である。本校でも教職員一人ひとりの指導力向上が求められている。

これまで、本校では、「自ら考え、学び、表現する児童」を育む学びが、豊かな学びにつながることを考え、国語科や家庭科を中心に研究に取り組み成果をあげてきた。これまでの研究を生かし、また学習指導要領の改訂も踏まえ、平成31年度（令和元年度）から3か年計画として、研究主題を「自ら考え、学び、表現する児童の育成」、副題を「豊かな学びをつくり、自ら学びに向かう授業づくり」と設定し、主に算数科において「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行うこととした。

教師の願い

- ・自己肯定感（自分もやればできる、できるようになる）を高めたい。
- ・学習を通して、「人とかかわる」社会性を育てたい。
- ・互いに認め合い、協力し合って伸びていこうとする人間性を涵養したい。

自ら考え、学び、表現する児童の姿

- ・「自ら考える」 自分の考えをもつ 自分の経験や既習を生かし、自己の課題を見つける
- ・「自ら学ぶ」 学習に主体的に取り組み、学ぶことを楽しむ
- ・「自ら表現する」 一人ひとりの考えを出し合い、友達とともに考えを深め、認め合う（学び合う）



(2) 研究の構想

【学校教育目標】
 美しさを感じる子
 よく学ぶ子
 元気に運動する子
 がんばりぬく子

【研究主題】

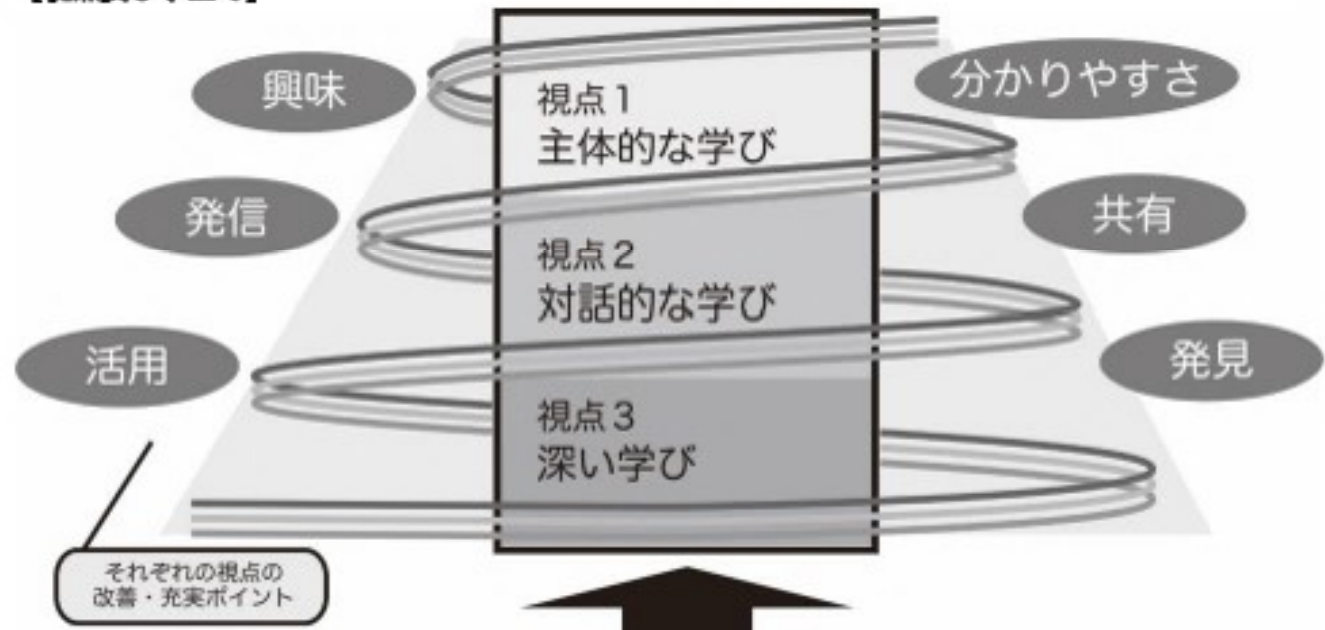
「自ら考え、学び、表現する児童の育成」
 ～豊かな学びをつくり、自ら学びに向かう授業づくり～

めざす児童像
 ○自分の考えをもち、生き生きと活動する子
 ○思いや考えを伝え合い、ともに学び合う子

【研究の仮説】

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点で、指導の改善・充実を図ることにより、豊かな学びを実現することができるであろう。

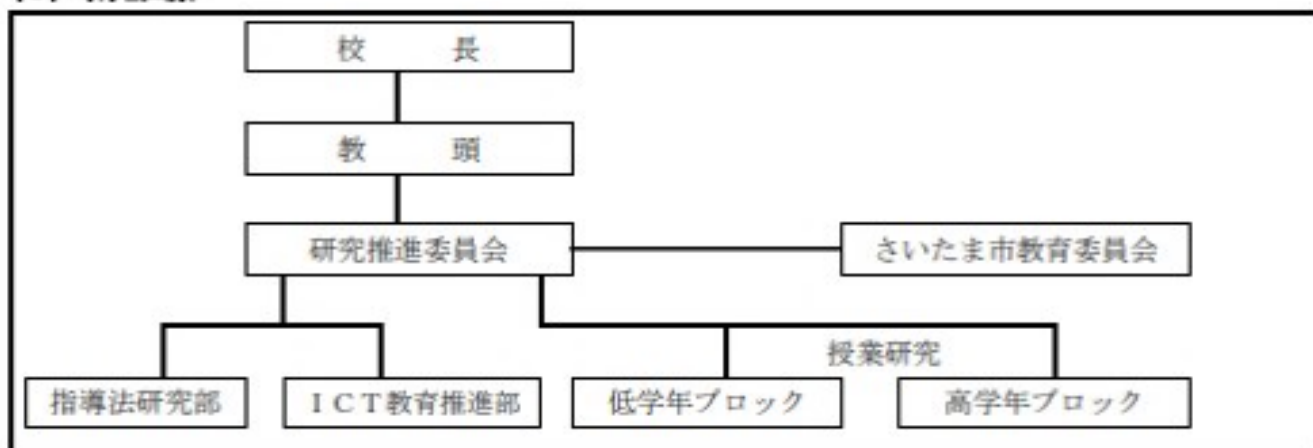
【視点及び手立て】



手立て1 思いや考えを生み出す工夫	手立て2 対話を促す工夫	手立て3 学習を生かす工夫
・導入の工夫	・対話をする目的、視点の明確化	・適用問題への取り組み
・見通しをもたせる工夫	・学習形態の工夫	・学びを振り返り、 次時の学習につなげる工夫
・ヒントカードの工夫	・話型の提示	
・ワークシートの工夫	・発問（切り返し）の吟味	・算数コーナーの活用

ICT機器の活用

(3) 研究組織



(4) 研究経過

令和元年度	
10月16日	授業研究会 6年「速さ」 授業者：村上 徹朗 教諭 指導者：太田 康雄 指導主事（指導1課）
1月16日	授業研究会 5年「百分率とグラフ」 授業者：小林 亮博 教諭 指導者：宇野 直紀 指導主事（指導1課）
2月	個人の研究成果発表
令和2年度	
10月12日	授業研究会 2年「長方形と正方形」 授業者：松下 和美 教諭 指導者：清水 則仁 主任指導主事（指導1課）
1月25日	授業研究会 5年「割合」 授業者：中村 康宏 教諭 指導者：清水 則仁 主任指導主事（指導1課）
2月	個人の授業実践発表
令和3年度	
7月 8日	授業研究会 3年「あまりのあるわり算」 授業者：西畑 誠太郎 教諭 指導者：清水 則仁 主任指導主事（指導1課）

指導法研究部の取組

1 研究の視点と手立ての整理

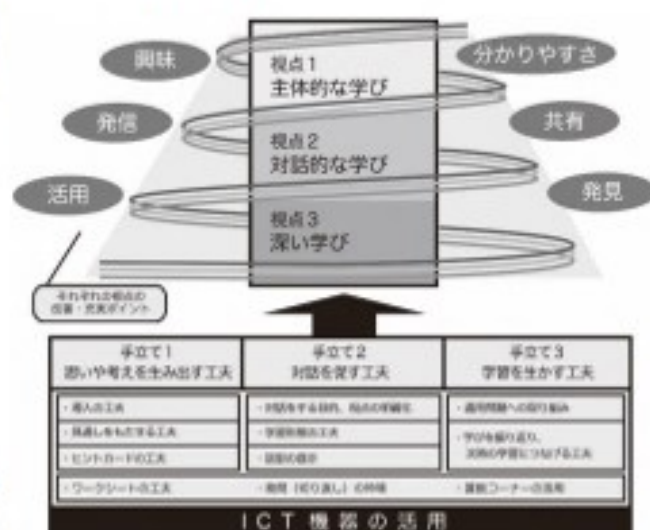
平成28・29年度の2年間、「自ら考え、学び、表現する児童の育成」を研究主題として、国語科を中心に国語力向上に取り組み、平成30年度は、さらに他教科にも視点を広げ、家庭科の研究に取り組んできました。

研究初年度の令和元年度は、その時の研究の手立てを基に研究を進めた。その後の授業実践をふまえて、手立てを

- ① 「思いや考えを生み出す工夫」
- ② 「対話を促す工夫」
- ③ 「学習を生かす工夫」

の3つに絞り、単元や授業内容に合わせた方法を選び、算教科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、日々の授業を実践した。

<研究の視点及び手立て>



2 授業研究前の職員全員での模擬授業やグループ協議による研究協議会

授業研究の前に、職員全員で模擬授業を行った。授業の展開を共通理解するとともに、発問、ワークシート、ヒントカード、板書等は手立てに迫るためにふさわしいものであったかを協議することで、改善を加えて授業を行うことができた。また、日々の授業にも生かすことができた。

研究協議会は、グループ協議をすることで、教職員一人ひとりが授業の手立てに基づいて授業を振り返り、研究を深めた。



職員全員での模擬授業の様子

3 ICT機器の活用

令和3年度には、『さいたま市GIGAスクール構想』におけるICT機器を活用した学びの改革の視点を加えた。エバンジェリストを中心にICT教育推進部を設定し、一人一台のタブレット端末の活用方法を広め、教職員一人ひとりが実践を重ね、有効活用について検討している。

ICT教育推進部の取組

一人一台のタブレットをどのように取り入れると効果的であるのか、アナログのよさとデジタルのよさを生かせる方法やタイミングをどうすればよいか、日々の授業実践の中で探っている。

<1学年の例>

- ・ノートの書き方の動画を作成し、児童一人ひとりが手元で真似をしながら書くことで個人のペースに合わせたノート指導ができる。
- ・具体物や半具体物つかうことに重点を置きたいため、児童の自力解決時にタブレットの使用はしていない。

<2学年の例>

- ・朝学習でドリルパークに取り組み、前時までの学習の振り返りに取り組んだ。
- ・図形の単元で三角形や四角形などの図形をタブレット上で操作し、平面図形に親しませることで興味関心を高めた。

<3学年の例>

- ・ヒントカードや自分の考えを、書き込んだり、操作したりして、自分の考えを表現する選択肢（手段）としてノートと同様に活用して、理解を促した。



<4、5、6学年の例>



- ・ノートに「図・式・言葉」で表した自分の考えを、タブレットのカメラ機能を使って取り込み、ミライシードで友達と共有することで互いに違う考えに触れながら理解を深められるようにした。
- ・プログラミング学習に取り組み、「公倍数」や「多角形」といった学習を多様な見方で考えられるように取り組んだ。
- ・Teamsで教師が作成した教材（excelやpowerpoint）を配布し、必要に応じて手元でヒントを見ながら問題に取り組んだり、自宅でのオンライン授業でも課題に取り組んだりすることができるようにした。

